

半七捕物帳

お照の父

岡本綺堂



「いつか向島でお約束をしたことがありますたっけね」

「お約束……。なんでしたっけ」と、半七老人は笑いながら首をかしげていた。

「そら、向島で河童かっぱと蛇の捕物の話。あれをきよう是非うかがいたいんです」

「河童……。ああ、なるほど。あなたはどうも覚えがいい。あれはもう去年のことでしたらう。しかも去年の桜どき——とんだ保名やすなの物狂いですね。なにしろ、そう強情しやうじやうにおぼえていられちやあ、とてもかなわない。こうなれば、はい、はい、申し上げます、申し上げます。これじゃあどうも、あなたの方が十手を持っているようですね。ははははは。いや、冗

談はおいて話しましょう。御承知の通り、両国の川開きは毎年五月の二十八日ときまっていたんですが、慶応の元年の五月には花火の催しがありませんでした。つまり世の中がそうぞうしくなつたせいで、もうその頃から江戸も末になりましたよ」

老人は昔を偲しのび顔に話し出した。

「その二十八日の午ひる過ぎでした。いつもの年ならわたくしも子分どもを連れて、両国界隈を見廻らなければならぬんですが、今年には川開きも見あわせになつたといふので、まあ樂ができると思つて神田の家に寝ころんでいますと、一人の若い女が駈け込んで来たんです」

女は女房のお仙をつかまえて何か泣きながら話しているら

しかつたが、やがてお仙に連れられて半七の枕もとへいざり込んで来た。起き直つて見ると、それは柳橋のお照という芸妓の妹分で、お浪という今年十八の小綺麗な女であつた。

「やあ、浦島が昼寝をしているところへ、乙姫さんが舞い込んで来たね」と、半七は薄ら眠いような眼をこすりながら笑つた。「ごとしは花火もお廃止だというじやあねえか。どうも不景気だね。だんだんに世の中が悪くなるんだから仕方がねえ。それでもいつもの日と違うから、茶屋や船宿ふなやどはちつとは忙がしかろう」

云いながらよく視ると、柳橋の若い芸妓は島田を式かたのごとく美しく結いあげていたが、顔には白粉のあともなかつた。自体がすこし腫れ眼縁まぶちのまぶたをいよいよ泣き腫らしていた。花火はなくともきようは川開きという書入れものびの物日に、彼女

はふだん着の浴衣のまままで家を飛び出して来たらしかった。

「どうしたんだ。姉さんと何か喧嘩でもしたのか。この頃はもう何か出来たという評判だから、それで姉さんといがみ合ったんじやあねえか。そんな尻をおれの方へ持って来たって、辻番が違うぜ」と、半七はからかうように相手の顔をのぞくと、お浪は嫣然にこりともしなかつた。

「いいえ、お前さん。そんなどころじやないんですとさ」と、お仙も顔をしかめながら云つた。「姉さんが今、番屋に止められたと云つて、な、あちゃんが泣き込んで来たんです。どうしたんでしようねえ」

「ねえさんが番屋へあげられた」と、半七も団扇うちわの手をやすめた。「なにかお客の引き合いじやあねえか」

「じやあ、親分さんはまだ御存じないんですか」と、お浪は

眼を拭きながら云った。

「なんにも知らねえ。おめえの家うちに何かあったのかえ」

「お父っさんがけさ殺されたんですよ」

お浪の話によると、けさの六ツ（午前六時）前にお照の家の戸を軽くたたたく者があつた。朝寝坊の芸妓家げいしやでは、台所に近い三畳で女中のお滝がようよう蚊帳かやをはずしているところであつた。戸をたたたく音を聞きつけて、お滝はすぐに入口へ出て行こうとすると、茶の間の六畳に寝ていたお照の父の新兵衛が蚊帳の中からあわてて呼び止めて、出てはいけない、明けてはいけないと、小声で叱るように云った。叱られてお滝も少しためらっていると、やがて表を叩く音は止んだ。と思うと、今度は裏口の方から跳り込んで来たものがあつた。お滝が起きると、すぐに水口みずぐちの戸を一枚あけて置いたので、得えたい体のわ

からない闖入者は薄暗がりの家の奥へまっしぐらに飛び込んで、新兵衛の蚊帳のなかへ鼠のようにくぐって這入った。年のわかいお滝は呆氣あっけに取られて眺めていると、かれは忽ち蚊帳から這い出して来て、もとの水口から駈け出してしまった。まだ起きたばかりで半分寝ぼけているお滝には、何がどうしたのか判らなかつた。彼女はしばらく夢のように突っ立っていたが、なんだか少し不安にも思われるので、そつと茶の間へはいつて蚊帳の中をのぞいて見ると、新兵衛の寝衣ねまきには紅い血が一面に泌み出していた。

腰をぬかさないうばかりにびっくりして、お滝は二階へかけ上がった。二階には娘のお照と妹芸妓のお浪とが一つ蚊帳のなかに寝ているので、彼女は忙がわしく二人の女をよび起した。二人もおどろいて降りてみると、新兵衛は刃物で喉笛を

切られてもう死んでいた。三人は一度に声をあげて泣き出した。朝寝の町もこの騒ぎにおどろかさされて、近所の人達もだんだんに駈けあつまつて来た。町役人ちやうから式かたの通りに変死の届けを出して、与力同心も検視に出張した。

新兵衛は誰にどうして殺されたか、唯一ゆいいつの証人は女中のお滝であるが、彼女は十七の若い女で、寝惚けていたのと狼狽うろたえていたのとで、もちろん詳しいことはなんにも判らなかつた。彼女が番屋で申し立てたところによると、曲者は背の低い小児こどものような怪物で、顔もからだも一面に黒かったのを見ると、おそらく裸体であつたらしい。起たつて歩くかと思うと、這つてあるいた。その以上にはお滝はなんにも記憶に残っていないとのことであつた。併しこんな奇怪なあいまいな申し立てを、係りの役人は容易にほんとうとは受け取らなかつた。

お滝はそのままに番屋に止められてしまった。

お照もお浪も無論に調べられた。お浪は仔細ないと認められて一と先ず釈ゆるされたが、お照は申し口に少し胡乱うろんの廉かじがあるといふので、これも番屋に止められた。これだけのことが決まったのは、その日もやがて午に近い頃で、月番の行事ぎょうじや近所の人達がお照の家に寄り集まっていたいろいろに評定を凝こらしたが、差し当りはどうするといふ分別も付かなかつた。この上は然るべき親分の力を藉かりるよりほかはあるまいといふので、お照もお浪もかねて半七を識しっているのを幸いに、お浪は着のみ着のまままで神田まで駈け付けたのであつた。

「そりやあちつとも知らなかつた。十手に対しても申し訳がねえ」と、半七はすこし驚かされた。「なにしろ変なものが飛び込んだものだね。子供のよくな真つ黒なものかえ」

「お滝はそう云っているんです」と、お浪も腑に落ちないような顔をしていた。

「猿じゃありませんかね」と、お仙がそばから口を出した。

「やかましい。御用のことに口を出すな」

叱り付けて、半七はしばらく考えた。猿芝居の猿が火の見の半鐘を撞ついて世間をさわがした実例は、彼の記憶にまだ新しく残っている。しかし猿が刃物を持って人を殺しに来るとは、作り話なら知らぬこと、実際には滅多めったにありそうにもないように思われた。

「それにしても、姉さんはなぜ止められたんだ。云い取り方が拙ますかったんだね」

「そうでしょう。止められると聞いたら、姉さんは蒼い顔をして黙っていました」

「姉さんは一体どんなことを調べられた。おめえも一緒に行つたんだから、知っているだろう」

この問いに対して、お浪ははかばか拂々しい返事をしなかった。彼女はお仙が出してくれた団扇をいじ弄くりながら、黙って俯向いていた。

「おい、何もかも正直に云つてくれねえじゃあいけねえ。姉さんが助かるのも助からねえのも、おめえの口一つにあることだ、なんでもみんな隠さずに云つて貰いてえ。姉さんはこの頃なにか親父とちやん折り合いの悪いことでもあつたんじやあねえか」

「ええ。この頃は時々ちやんに喧嘩をすることがあるんです」と、お浪はよんどころなしに白状した。

「情夫れこの一件かえ」

「いいえ、そうじゃないんです」

「だって、姉さんには米沢町（ちやうやく）の古着屋の二番息子が付いているんだらう」

「それはそうですけれど、喧嘩（けんか）の基（もと）はそれじゃないんです。家（うち）のお父っさんが柳橋を引き払って、沼津とか駿府とか遠いところへ引越してしまおうというのを、姉さんが忌（いや）だと云つて……」

「そりやあ忌（いや）だらう」と、半七はうなずいた。「なぜ又、おめえのところの親父（おやぢ）はそんなおかしなことを出しぬけに云い出したんだ。なにか訳があるだらう」

「それは判らないんですが、ただ無闇にこの土地にいるのは面白くないと云つて……。それで姉さんとたびたび喧嘩（けんか）をしているんです。あたしも中へはいつて困ったこともあります

が、なぜ引つ越すんだか、その訳が判らないんですもの。良
いとも悪いとも云いようがありません」

「おかしいな。すると、その矢先に親父が殺されたんで、姉
さんが……。まさかに自分が手をくだしもしめえが、何かそ
れに係り合いがあるだろうと見込みを付けられたんだね。ま
あ、無理もねえところだ。おれにしても先ずそんなことを考
える。そこで古着屋の二番息子はまだ呼ばれなかつたかえ」
「呼びに行つたんでしよう。ですけれど、ゆうべから何処へ
か行つて、まだ帰らないんだそうです」

「あの息子は何とか云つたつけね」

「定さんというんです」

「違ええねえ。定次郎というんだね。その定次郎はゆうべか
ら帰らねえか」

半七は腕を拱くんだ。どういふ仔細があるか知らないが、おやじの新兵衛は土地を売って他国へ行こうという。娘のお照は江戸を離れるのが忌いやなものと、もう一つには情夫おとこと別れるのが辛いので、どうしても行かないと駄々をこねる。親子喧嘩がたびたび続く。その挙げ句に新兵衛が何者にか寝込みを襲われて殺された。こう煎じ詰めてくると男と女とが共謀か、それとも男ひとりの料簡か、どっちにしてもその下手人げしゅにんはかの定次郎らしく思われるのが、誰の眼にも映る暗い影であった。それを正直に白状しないために、お照は番屋に止められたのであろう。半七もその以上には、差し当って目串のさしようがなかった。

唯ここに一つの疑問として残っているのは、なぜ彼の新兵衛が住み馴れた柳橋の土地を立ち退いて、沼津とか駿府とか

の遠い国へ引つ込もうというのか。半七はその仔細を知りたかつた。

二

「おめえは一つ家うちにいるんだから、何もかも残らず知つてい
る筈だが、お前のところの親父ぢやんは人から怨まれるような覚え
があるかえ」と、半七はまた訊いた。

むかしは知らないが、今は決してそんな事はないとお浪は
確かに云い切つた。お父さんが正直で、情けぶかい人であ
ることは近所の人達がみんな能く知つている。月の四日には
きつと両国の橋番の小屋へ行って、放し鰻うなぎをして帰るのを例
としてゐる。神まいりにも行く。寺詣りにもゆく。それで博

奕は打たず、酒は飲まず、こうした稼業には似合わないくらの堅気かたぎな結構人である。もしも家のお父げとうつさんを怨む人があれば、それは外道の逆恨みか、但しは物の間違いでなければならぬ。しかし今度の殺され方を見ると、どうしても物取りではない、意趣斬りであるらしい。それが自分にはわからないと彼女は云った。

「それほど結構な人間なら、土地にいらねえような不義理をした訳もあるめえに、折角売れ出した娘を無理に引き摺つて、なぜ草深いところへ引つ込む気になつたのか。どうしてもおめえ達には心当りがねえんだね」

「どうも判りません」と、お浪はやはり頭かぶりをふった。「ですけれども、たった一度こんな事があつたそうです。あたしが見た訳じゃありませんけれども、お滝の話には何でも先月の

初め頃に、もう日の暮れかかる時分に一人の六部が家の前に立って、なにか鐸かねを鳴らしていると、そこへ丁度お父つきさんが外から帰って来て、その六部と顔見あわせて何だか大変にびっくりしたような風だったそうで、それから二人が小さい声でしばらく立ち話をして、お父つきさんはその六部に幾らかやったらしいということでした。その後にも日が暮れると、その六部がときどきたずねて来て、一度は草鞋をぬいで茶の間へ上がって来たこともあるそうですが、あたし達はいつも其の時はお座敷へ出ていたのでよく知りません。なんでもその六部が来るようになってから、お父つきさんは田舎へ行くと云い出したらしいんですが……」

「ふむう。そんなことがあったのか」

半七の眼は動いた。結構人と評判の高い老人と、なんだか

怪しげな六十六部と、この間にどういふ糸が繋がっているかを、横から縦からいろいろに想像していたが、やがて彼は波浪に訊いた。

「おめえのところの親父は刺青ちやんほりものをしていたっけね」

「ええ。両方の腕に少しばかり」

「なにが彫つてある」

「若い時の道楽で、こんなものは見得みえにも自慢にもならないと、なるだけ隠すようにしていましたが、あたし達は能く見たこともないんですが、なんでも左の方は紅葉、右の方には桜が彫つてあつたようです」

「背中にはなんにもねえか」

「背中は真つ白でした」

「ちゃんは幾つだっけね」

「たしか五十九だと思つています」

「姉さんは貫い児の筈だが、親父は江戸者じやあるめえね」

「なんでも信州の方だとかいうことですが、姉さんもよく知らないようです。善光寺様の話を時々にしますから、信州の方にやあ相違ないと思ひますけれど……」

訊くだけのことは大抵訊き尽したので、半七はお浪を帰した。いずれ後から行くから、それまでおとなしく待つていろと云うと、お浪もくれぐれも頼んで帰った。

「お仙。ちよいと出るから着物を出してくれ、なんだか蒸し暑いと思つたら、少しくもつて来たようだな」

支度をして門かどを出ると、半七は子分の幸次郎に逢つた。

「親分。柳橋の一件がお耳にはいつていますかえ」

「やつと今聞いたんだ。申し訳がねえ。なにしろ、いい所へ

面つらを持って来てくれた。これから柳橋のお照の家まで行つてくれ」

「ようがす」

二人はすぐに柳橋へゆくと、お照の家には近所の人達があつまつて、何かごたごた騒いでいた。待ち兼ねたように出て来たお浪を蔭へ呼んで、半七はその後なんにも変つたことはないかと訊くと、別に変つたこともないが、もう少し前に古着屋の息子が来て、お照が番屋へ止められた話を聞いて、真つ蒼になつて歸つたとお浪は話した。

「どうもその古着屋のせがれが面白くないじゃありませんか。かまわずに引き挙げてしまいませんか」と、幸次郎はささやいた。

「まあ、待て。おれも一旦はそう思ったが、まあ、それは二の

次だ。もう少しほかに穿索さくつて見る所がありそうだから、あんまりどたばたして方々へ塵埃ほこりを立てねえ方がいい」

半七は内へはいった。女中のお滝はどうしたと訊くと、けさから番屋へ止められたままで、まだ下げられないとの事であつた。お照も無論帰つて来なかつた。新兵衛の死体はもう検視が済んで、茶の間の六畳に横たえてあつた。お照の下げられるのが遅いようならば、この時節柄いつまでも仏を打ちやつては置かれないので、近くの者が寄りあつまつて何とか葬式とむらいを済ませなければなるまいと云つていた。半七も一応死人の傷口をあらためると、それは剃刀のような刃物で喉をえぐつたらしかつた。

それから水口みずぐちの方へまわつて、怪しい物のはいつて来たという路すじを調べてみると、台所の柱に黒い手の痕のような

ものが小さく薄く残っているのを見つけた。半七は懐ろ紙をとりだして綺麗に拭き取って、そばに立っている幸次郎にその紙をそつと見せた。

「こりやあなんだ」

「鍋墨のようですね」

「向う両国に河童かっぱは何軒ある」

「河童は……」と、幸次郎は考えた。「たしかに一軒だと思っています」

「それじゃ訳はねえ」と、半七はほほえんだ。「お前はこれからその小屋へ行つて、河童を引き挙げて来い。だが、まだ少し時刻が早い。商売の邪魔をするのも可哀そうだから、もうちつと待っていると日が暮れるだろう。小屋の閉場はねるのを待っていて、すぐに河童をあげるようにしろ」

幸次郎は心得て出て行つた。半七は茶の間へ戻つて、お浪にことわつて仏壇から過去帳を出して繰つてみると、月の四日のところは寂寂幽信士と戒名が見えた。新兵衛が両国の川へ毎月放し鰻をするというのは四日である。この四日の仏が新兵衛になにか特別の關係をもっていなければならぬと考へたので、半七はお浪に向つて、この仏はこの家の何者だと詮議したが、お浪はそれを知らないと言つた。しかし、この家を取つては余ほど大切の仏であるらしく、その日には新兵衛が手ずから仏壇に燈明を供えて、なにか念仏を唱えていたとのことであつた。

「ちゃんはこの頃どつかへ行つたことがあるかえ」

「いいえ。もとから出嫌いの人でしたが、この頃はちつとも外へ出ないで、内にばかり坐っていました。そうして、なん

だか人に逢うのを忌がっているようでした」と、お浪は云つた。

自分の鑑定がだんだんに中つてくるあたると半七は思った。彼はもう一度新兵衛の死骸をあらためると、その左の二の腕には紅葉を一面に彫つてあつて、その蒼黒い葉のかげに入墨いれずみの痕がかくされているのが確かに判つた。新兵衛はその過去の犯罪の暗い履歴をもつていて、その腕の刺青ほりものは入墨を隠すためであることもすぐに覺られた。彼はその罪を悔いて情けぶかい結構人になつた。その罪をほろぼすために毎月の放し鰻をした。かれの犯罪は月の四日の仏に關係をもっているらしいと半七は思った。しかし、どうしてその仏を見付け出しているか。半七はさすがに見当が付かなかつた。

そのうちに浅草の七ツ（午後四時）がきこえたので、半七は

ともかくもここを出て、向う両国へまわつて幸次郎の模様を見て来ようと、居あわせた人達に挨拶して門かどを出ると、陰った空のうえから紫の光がさつとほとぼしつて来た。おや、光つたなと思う間もなく、大粒の雨がどつと降り出したので、半七は舌打ちをしながら再び内へ引つ返した。

「とうとう降つて来た」

「夕立ですからすぐに止みましょう」と、お浪は入口の戸を一枚閉めながら云つた。

よんどころなしに半七は茶の間へ戻つて又坐ると、稲妻がまた光つて、雷の音がだんだん近くなつて来た。ぶちまけるような夕立が飛沫しぶきを吹いて降り込んで来るので、みんなも手伝つて方々の戸を閉めた。狭い家のなかには線香の煙りがうず巻いてみなぎつて、息がつまるほどに蒸し暑いのを我慢し

て、半七も扇を使いながら其処に晴れ間を待っていると、雨はやがて小降りになったので、お浪が傘を貸そうというのを断わつて出た。半七は手拭をかぶつて、尻を端折はしよつて、ぬか
るみを飛び飛びに渡りながら両国橋を越えた。

川向うの観世物小屋はもう大抵しまつていた。今の夕立が
往来の人を追つ払つてしまつたらしく、ぐしよ、濡れになつた
菰張こもりの小屋の前には一人も立つてゐる者はなかつた。半七
は向う側の心太屋こころてんやの婆さんに訊いて、そこだと教えられた河
童の観世物小屋のまえに立つて見あげると、白藤源太らしい
相撲取りが柳の繁つてゐる堤を通るところへ、川の中から河
童が飛び出して、その行く先を塞ぐように両手をひろげてい
る絵看板が懸かけてあつた。

その頃の向う両国にはお化けや因果物のいろいろの奇怪な

観世物が小屋をならべていた。河太郎もその一つで、葛西かさいの源兵衛堀で生け捕ったとか、筑後の柳川から連れて来たとか、子供だましのような口上を列べ立てているが、その種はもう大抵の人にも判っていた。十三四歳の男の児を河童頭に剃らせて、顔や手足を鍋墨で真つ黒に塗って、大きな口から紅い舌をべろりと出して、がらがらがあと思議な鳴き声を聞かせる。ただそれだけの他愛もない芸であるが、それでも河童とか河太郎とかいう評判に釣り込まれて、八文の木戸銭を払う観客が少なくない。半七はお照の台所の柱に残っていた鍋墨の手形から、新兵衛殺しの下手人はこの河童小僧と鑑定したのであった。表はもう閉まっているので、裏木戸の方へ廻つてゆくと、楽屋の者もみんな帰ってしまった、楽屋番の爺さんが一人で後片付けをしているところであった。

「おい、六助さん。お前はこの頃ここへ来ているのか」

「おや、親分さんですか。どうも御無沙汰をいたしました」と、楽屋番の六助はあわてて挨拶した。

「お化けの方はなぜ止したんだ」

「へえ、どうもあの楽屋は風儀が悪うござんして、御法度の慰み事が流行るはやもんですから……」

「爺さんもあんまり嫌いな方じゃあるめえ。時に、家の幸次郎は見えなかつたかね」

「幸さんはお見えになりました。いや、それで楽屋の者も心配して居りますよ」

「河童を連れて行ったのか」

「へえ、すぐに帰すと仰しやいましたけれど……。河童がなかなか素直に行きませんのを、無理にだまして連れておいで

になりました」

「河童は幾つで、なんというんだえ」

「本名は長吉と申しまして、十五でございます」

「どこから拾って来たんだ。親はねえのか」

「なんでもこの一座が四、五年前に信州の善光寺へ乗り込んだ時に連れて来ましたので、お察しの通り両親はございませ
ん。おふくろに死なれて路頭に迷っているのを、まあ拾いあげて来ましたようなわけで……。いえ、わたくしは能くは存
じませんが、なんでもそんな話でございます」

「親父もないんだね」

「へえ、親父は長吉が生まれると間もなく死にましたそう
で」「変死かえ」と、半七はすぐに訊いた。

「よく御存じで……。高い声では申されませんが、なんでも

悪いことをしてお仕置になりましたそうで……」

「ふむう、そうか。そこで此の頃、河童のところへ誰かたずねて来た者はねえか」

六助は少し考えていたが、やがて思い出したようにうなずいた。

「あります、あります。廻国かいこくの六部のような男が……」

三

半七の商売を知っている六助は、訊かれるに従って総すべてのことをしゃべった。六部は四十近い、痩せて背の高い、眼つきまなこの少し恐ろしい男で、長吉の叔父だという話であった。顔立ちかたちの幾らか肖にているのを見ると、それは嘘ではないらしい

と六助は云った。その六部がきのう普通の浴衣ゆかたを着て、樂屋へふらりとたずねて来て、鰻を食わしてやるからと云って長吉をどこへか連れ出した。

「その六部は何処にいるのか知らねえか」

「なんでも下谷の方にいるということですが、宿の名は存じません」

その以上のことは六助はまったく知らないらしいので、半七はこころで打ち切つて小屋を出た。それにしても幸次郎はどこへ河童を連れて行つたか。大方そこらの番屋へ引き挙げたのであろうと、半七はその足で近所の自身番へ行つてみると、そこには幸次郎の姿も見えなかった。それでも念のために店へはいつて訊くと、自身番の親方は面目ないような顔をして答えた。

「実はそのことで幸次郎さんに大変怒られまして……。なんとも申し訳がございません」

「どうしたんですね」

「河童に逃げられました」と、親方は額の汗ひたいを拭いた。そこに居あわせた番太郎も小さくなって俯向いた。

河童を取り逃がした事情はこうであつた。さつき幸次郎が観世物小屋から河童を引っ張つて来て、この自身番へあずけて行つた。自身番には店の側に一種の留置場ともいうべき六畳ほどの板の間があつて、その太い柱に罪人を縄でつないで置くのが例であつた。河童もそこに繋がれていると、俄かに大夕立が降り出したので、番太郎はあわてて自分の家へ帰つた。自身番の者共もおどろいて其処らを片付けた。店先の履き物を取り込む者もあつた。裏口の戸を閉めにゆく者もあつ

た。そのどさくさまぎれに河童は縄をぬけて逃げ出した。勿論、その逃げてゆくうしろ姿を見つけた者はあつたが、人間の河童は陸おかでも身が軽いので、あれあれといううちに吾妻橋あずまの方へ飛んで行つてしまった。そこへ幸次郎が歸つて来た。

彼は柳橋へ半七を迎えに出たのであるが、途中で夕立にふり籠こめられて、そこらの軒下に雨宿りをして、小降りになるのを待つてお照の家へゆくと、どこで行き違つたか半七はもう出てしまつた後であつたので、また引返して自身番へくると、この始末である。幸次郎の怒るのも無理はなかつた。彼は腹立ちまぎれに居あわせた者どもを頭ごごなしに叱り付けた。そうして、すぐ河童のあとを追つて行つた。

「そりやあ拙ますいことをやつたもんだ。おめえ達の不行き届きで、なんと云われても仕方がねえ」と、半七はその話を聴い

て眉をよせた。

「親分さん、実に申し訳がございません」

あやまつても詫びても今更取り返しは付かない。ここでぐずぐず云っているよりも、幸次郎に加勢して河童のゆくえを早く探し出す方がましだと思つたので、半七は草履を自身番にぬいで置いて、はだし 跣足になつて駈け出した。どこあてというもないが、吾妻橋の方角へ逃げたというのを手がかりに、彼は岸づたいに急いで行つた。

むやみに駈け出しても仕方がないので、彼はこんな小僧を見なかつたかと途中で訊きながら歩いた。すると、一軒の荒物屋へ此の夕立の最中に一人の真つ黒な小僧が飛び込んで来て、店先にかけてあつたすげがき菅笠を搔つさらつて逃げたということが判つた。その小僧は笠をかぶつて小梅の方角へ行つたと

いうのを頼りに、半七は向島の方へまた急いだ。

雨はもう止んだが、葉桜の堤は暗かった。水戸の屋敷の門前で、幸次郎のぼんやりと引っ返して来るのに出逢った。

「どうした。いけねえか」

「自身番の疝気野郎、飛んでもねえどじを組みやがって、お話にもならねえ」と、幸次郎は忌々しそうに云った。「なんでもこつちの方角へ来たらしいんですが、どうしても当りが付かねえには困りました。どうしましょう」

「仕方がねえ」と、半七も溜息をついた。「だが、餓鬼のこつた。まさかに草鞋を穿くようなこともあるめえ。いずれ何処からか這い出して来るだろう。なにしろ、腹が空って来た。そこらで蕎麦でも手繰ろう」

二人は堤下へ降りて食い物屋をさがした。蜷の看板をかけ

た小料理屋を見つけて、奥の小座敷へ通されて夕飯を食っているうちに、萩を一ぱいに植え込んであるらしい庭先もすっかり暗くなつて、庭も座敷も藪蚊の声に占領されてしまった。「日が暮れたのに蚊いぶしを持って来やあがらねえ。この村で商売をしていながら、気のきかねえべらぼうだ。これだから流行らねえ筈だ」

むしやくしや腹の幸次郎は無暗にぽんぽんと手を鳴らして、早く蚊いぶしをしろと呶鳴った。女中は蚊いぶしの道具を運んで来て、頻りにあやまった。

「相済みません。店でお化けの話を聴いていたもんですから、ついうっかりして居りました」

「へえ、お化けの話……。そりやおめえの親類の話じゃあねえか」

「よせよ」と、半七は笑った。「ねえさん、堪忍してくんねえ。この野郎少し酔っているんだから。そこで、そのお化けがどうしたんだ。ここの家へ出るわけじゃあるめえ」

「あら、御冗談を……。たった今、家の旦那が堤で見て来たんですって。嘘じゃない、ほんとうに出たんですって、河童のようなものが……」

「え、河童だ」と、幸次郎もまじめになった。

半七はその主人をちよいと呼んでくれと云った。呼ばれて出て来たのは四十五六の男で、しきいこ 闕越しで縁側に手をついた。

「御用でございますか」

「いや、ほかじゃあねえが、おまえさんはたった今、堤で何か変なものを見たそうだね。なんですえ」

「なんでございませうか。わたくしもぞつとしました。相

手がお武家ですから好うござんしたが、わたくし共のような臆病な者でしたら、すぐに眼を眩まわしてしまったかも知れませんか」

「河童だというが、そうですかえ」と、半七はまた訊いた。

「お武家は河童だろうと仰しやいました。まあ、こうでございます。わたくしが業平なりひらの方までまいりまして、その帰りに水戸様前からもう少しこっちへまいりますと、堤の上は薄暗くなつて居りました。わたくしの少し先を一人のお武家さんが歩いておいででございまして、その又すこし先に、十四五ぐらいかと思うような小僧が菅笠をかぶつて歩いて居りました」

「その小僧は着物をきていましたかえ」

「暗いのでよく判りませんが、黒っぽいような単衣ひとえを

着ていたようです。それが雨あがりの路悪みちわるの上に着物の裳すそを引き摺ひつて、跣足はだしでびちよびちよ歩いているので、あとから行くお武家さんが声をかけて……お武家さんは少し酔っていらつしやるようでした……おい、おい、小僧。なぜそんなだらしない装なりをしているんだ。着物の裳をぐいとまくつて、威勢よく歩けど、うしろから声をかけましたが、小僧には聞えなかつたのか、やはり黙ってびちよびちよ歩いているので、お武家はちつと焦じれつたくなつたと見えまして、三足ばかりつかつかと寄つて、おい小僧、こうして歩くんだと云いながら、着物の裳をまくつてやりますと……。その小僧のお尻の両方に銀のような二つの眼玉がぴかりと……。わたくしはぎよつとして立ちすくみますと、お武家はすぐにその小僧の襟首を引つ掴とんで堤下どてしたへほうり出してしまいました。そうして、は

はあ、河童だと笑いながらすたすたと行っておしまいなさいました。わたくしは急に怖くなって、急いで家へ逃げて帰ってまいりました」

半七は幸次郎と眼をみあわせた。

「そうして、その化け物はどっちの堤下へ投げられたんですえ」

「川寄りの方でございます」

「なるほど不思議なことがあるもんですね」

勘定を払って、二人は忽々にそこを出た。

四

「親分。そのお化けというのは河童ですね」と、幸次郎はさ

さやいた。

「ちげえねえ。たしかに河童だ」

そそっか
粗忽しい武士はほんとうの河童だと思つたかも知れないが、

それは河童の長吉に相違ないと半七は思つた。両国の河童は真つ黒に塗つた尻の右と左に金紙や銀紙を丸く貼りつけて、大きい眼玉と見せかけ、その尻を無造作に観客の方へむけて、四つん這いに這いまわるのを一つの芸当としている。酔つている武士と、臆病な亭主とは、ゆう闇の薄暗がりでその尻の眼玉におどろかさされたのであろうが、半七から観れば、その尻の光つたというのが却つてほんとうの化け物でない証拠であつた。

「なにしろ、早く堤下へ行つてみようぜ」

亭主の教えてくれたのは此処らであらうと見当をつけて、

二人は隅田川に沿うた堤下に降りると、岸と杭くいとのあいだに挟まつて何か黒いものが横たわつていているらしかった。幸次郎はすぐに引き摺りあげて見ると、果たしてそれは河童の長吉であつた。かれは武士に手ひどく投げつけられたはずみに、樹の根か杭かで脾腹ひばらを打たれたのであろう、片足を水にひたして息が絶えていた。杭に挟まれたのがこつちに取つて勿怪もつけの幸いで、さもなければ下流しもての方へ遠く押し流されてしまつたかも知れなかつた。

「ほんとうに死んだのじやあるめえ。そこらまで負つて行つてやれ」と、半七は云つた。

河童を負つて幸次郎は堤へあがつた。半七は先へ立つて元の料理屋へ引つ返すと、家うちじゆうの者はおどろいて騒いだ。怖いもの見たさで女中たちもそつと覗きに來た。

「おい、御亭主。気の毒だがこの河童の始末をして貰いてえ。泥だらけのこの姿じゃあ座敷へ入れることができねえ」

半七の指図で、店の者は手桶に水を汲んで来た。河童の正体は大抵わかったので、亭主も急に強くなった。彼は家内のものと一緒になって河童の顔や手足を洗ってやった。尻の銀紙を発見したときに亭主も思わず嘔き出した。こうした手当てには馴れているので、半七は河童を奥の小座敷へかつぎ込んで介抱すると、長吉はやがて息を吹き返した。半七は更に用意の薬を飲ませた。水を飲ませた。

「やい、河童。すっかりしろ。もう人間らしくなったか。こは料理屋の座敷だが、てめえを調べるのは御用聞きみじんぼうの半七という者だ。楽屋番を相手に微塵棒みじんぼうをしゃぶっている時とは訳が違うから、そのつもりで返事をしろ。てめえは今朝、柳

橋の芸妓屋へ這い込んで、親父を剃刀で殺したろう。覚えがねえとは云わせねえ。台所の柱にてめえの手のあとが確かに残っていた。さあ、ありていに申し立てろ。第一、てめえにうしろ暗いことがねえならば、なぜ番屋を逃げ出した。おまけに途中で笠を盗んで逃げやがったろう。さあ、証拠はみんな揃っているんだ。これでも恐れ入らねえか」

相手は子供である。半七に鋭く睨みつけられて、河童はもろく恐れ入った。彼は叔父の長平にそそのかさされて、お照の父の新兵衛を殺したに相違ないと素直に白状した。

「それにしても、なぜその新兵衛を殺す気になったんだ。てめえの叔父さんは新兵衛に遺恨があるのか」

「新兵衛という奴はおいらのお父っさんの仇なんだ。おいらあ其の仇討を立派にしたんだ」と、河童は鍋墨のまだ消え切

らない顔に大きい眼をひらかせ、俄かに肩をそびやかした。「仇討……。ほんとうか」と、半七は少し案外に思った。しかしだんだんその話を聴いてみると、これも一種の復讐には相違なかつた。

長吉の父は長左衛門といつて、信州善光寺の在ざいに住んでいた。お照の父の新兵衛はむかしは新吉といつて、やはり同じ村に生まれた者であつた。長左衛門も新兵衛も土地では札付きの悪党であつたらしい。今から十三年前に二人は共謀して隣り村の或る大尽だいじんの家へ押し込みにはいつて、主人夫婦と娘とをむごたらしく斬り殺した。その詮議があまり嚴重になつたので、新兵衛は土地の御用聞きのところへ駈け込んで、その罪人は長左衛門であると密告した。かれも共犯者であるらしいことは御用聞きも薄々察したであろうが、密告の功によつ

て彼は自由に土地を立ち退くことが黙許された。彼はすぐに何処へか逃げてしまった。長左衛門は召捕られて磔刑はりつけになった。

新兵衛は友を売って自分の身を全うしたのである。その事情が長左衛門の遺族の耳にも洩れたが、御用聞きも黙許で彼を逃がしたのであるから、今更どうすることも出来なかつた。長左衛門の女房は非常にそれを口惜しがって、死ぬきわまでも不実の友を呪っていた。長左衛門には長平という弟があつて、これも兄とおなじ血をわけた悪党で、兄が仕置になつた當時は隣国の越後の方にさまよつていたが、これを聞き伝えて故郷へ帰つて来た。新兵衛の裏切りを聞いて彼もひどく憤つたが、自分もうしろ暗い身のうえで、表向きには立派な口を利けないので、恨みを吞んで再びどこへか立ち去つてしまつ

た。

それから十年ほど経って、長平は久し振りで故郷へ又帰つてくると、嫂あねはもう死んでいた。甥の長吉は両国の河童に売られたという噂も聞いた。かさねがさねの一家の悲運を見て、長平もさすがに心さびしくなった。ここらでもう料簡を入れ替えて、兄や自分の罪ほろぼしに六十六部となつて廻国修行の旅に出ようと思ひ立つた。彼は仏の像を入れた重い笈おいを背負つて、錫杖しゃくじょうをついて、信州の雪を踏みわけて中仙道へ出た。それから諸国をめぐりあるいて江戸へはいつて来たのは、ことの花ももう散りかかる三月のなかばであった。彼は下谷辺のある安宿を仮かりの宿として、江戸市中を毎日遍歴した。

彼がふた月あまり江戸に足をとどめている間に、殆ど同時に敵と味方とにめぐりあつたのであつた。かたきは彼かのお照

の父で、新吉の名を今は新兵衛と呼びかえて、柳橋に芸妓屋を開いていることが判った。甥の長吉はやはり河童になって、両国の観世物小屋に晒さらされていることが判った。長平は甥にも逢った。偶然の機会から新兵衛にも出逢った。

新兵衛はもう生まれ変わったような善人になっているので、むかしの友達の弟に逢ってしきりに過去の罪を謝した。自分たちが手にかけて大尽一家の菩提ぼだいを弔うばかりでなく、長左衛門が仕置に逢ったのは二月四日で、その命日に毎月かならず放し鰻の供養を怠らないと云った。彼はある寺から長左衛門の戒名を貰って来て、仏壇まつに祀まつつてあることも話した。長平もむかしとは人間が違っているので、悔い改めているこの善人を執念ぶかく責めることも出来なくなつた。かれは新兵衛の罪をゆるすと云った。新兵衛はよろこんで、御報捨のし

るしだと云つて彼に二十両の金を贈つた。

その金が二人の禍いであつた。久し振りで二十両の大金を受け取つた六十六部は、その晩すぐに服装をこしらえて吉原へ遊びに行つた。それが口火くちびになつて彼の殊勝らしい性根はだんだんに溶けてしまつた。六十六部は再び昔の長平に立ちかえつて、新兵衛のところへ度々無心に行つた。しまいには金の無心ばかりでなく、彼は新兵衛の貰い娘このお照の美しいのを見て、飛んでもない無心までも云い出すようになった。相手の飽くことのない誅求ちゆうきゆうには、新兵衛もさすがにもう堪えられなくなつて、終には手きびしくそれを拒絶すると、長平はいよいよ羊の皮裘かわじころもをぬいで狼の本性をあらわした。彼は甥の河童をそそのかして親のかたきを討たせたのであつた。

「これは河童の長吉の白状と、長平の白状とをつきませたお話で、長吉は叔父の手さきに使われて、ただ一途に親父のかたき討の料簡でやった仕事なんです」と、半七老人は説明した。「つまり新兵衛の方はすっかり善人になり切っていたんですが、長平の魂はまだほんとうの善人になり切らないもんですから、すぐにあと戻りをして、とうとうこんな事件を出来させてしまったんですよ」

「長平は勿論つかまっただんですね」と、わたしは訊いた。

「河童の白状で大抵見当が付きましたから、それからお照の家の近所に每晚張り込んでいますと、新兵衛の初七日しよなのかが済んだ明くる晩に、案の定その長平が短刀を呑んで押し込んで来て、どうする積りかお浪を嚇かしているところを、すぐに踏み込んで召捕りました。長平は無論に死罪でしたが、長吉の

方はまだ子供でもあり、どこまでも親のかたきを討つつもりでやった仕事ですから、上にも御憐愍かみ ごれんびんの沙汰があつて、遠島えんとうというところで落着らくちやくしました。これが作り話だと、娘や芸妓や其の情夫の定次郎の方にもいろいろの疑いがかかつて、面白い探偵小説が出来上がるんでしようが、実録ではそう巧く行きませんよ。ははははは。ただちつとばかりわたくしの味噌をあげれば、はじめから芸妓や情夫の色っぽい方には眼もくれないで、なんでも善人の親父の方に因縁があるらしいと、その方ばかり睨み詰めていたことですよ。腕に入墨がはいっているくらいですから、新兵衛はその前にも悪いことをたくさんやっていたんでしようが、折角善人に生まれ変わったものを可哀そうなことをしました。河童をほうり出した武士ですか、それはどこの人だか判りません。その人は向島で河童を

退治したなどと一生の手柄話にしていたかも知れせんよ。まったくその頃の向島は今とはまるで違っていて、いつかもお話し申した通り、狸も出れば狐も出る、河かわうそ獺も出る、河童だって出そうな所でしたからね」

「蛇も出たんでしよう」

「蛇……いや、謎をかけないでもいい。ついでにみんな話しますよ。しかしこの蛇の方の話は少しあいまいなところがあるんですね。まあ、そのつもりで聴いてください。場所は向島の寮で、当世の詞ことばでいえば、その秘密の扉とびらをわたくしが開いたというわけです」

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和 61）年 3 月 20 日初版 1 刷発行

入力：tatsuki

校正：山本奈津恵

1999 年 8 月 17 日公開

2004 年 2 月 29 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。